



公益社団法人 岐阜県交響楽団

〒501-3133 岐阜市芥見南山3丁目7の10
TEL<058>244-0150 FAX 244-0151
ホームページ <http://gikyo.ktroad.jp/>

私と音楽

公益社団法人 岐阜県交響楽団

理事 山口 嘉彦



私と音楽との出会いは、1964年東京オリムピックの頃、私が小学校低学年の時に廻ります。演奏をしていたわけはありませんが、ピアノを習う姉の付き添いで音楽教室に行っておりました。赤い絨毯が敷いてあり、ソファーとテーブルと一体型ステレオが備え付けられている教室は、高度経済成長期、まるで誰もが憧れた応接間のようにでした。夕飯が終わると父はギターの練習を始めます。私たちが家族は、テレビの歌番組を見ながら、父のギターに付き合いました。土曜日には、学校から帰ると母が昼食を作りながら

トランジスタラジオを聴いていました。バス会社の朗らかなメロディーと、母の軽やかな鼻歌が思い出されます。中学に入ると、深夜放送を聴くようになりました。大人になったような心地で、ポップスやフォークソングの歌詞に思いを馳せました。私も家族も、「音楽を楽しむ」というよりも「音楽のある生活」を楽しんでいたのかもしれない。小さい頃に慣れ親しんだ音楽はどうやら私の体の奥底に染みこんでいるようで、今でもあの頃聴いた曲を耳にすると、淡い青春の記憶と、ほんの少しの気恥ずかしさが、さざめく波となつて胸に押し寄せてきます。

さて、私が岐阜県交響楽団を知ったのは平成15年、岐阜県交響楽団創立50周年記念の『東京公演』からです。当時私は東京に勤めており、忙しい毎日を送っていた時、父から、サントリーホールで岐響がコンサートを行うの

で聴きに来ないか、と誘われました。当日は大勢の観客が席を埋め尽くしており、同郷の士として勝手ながら誇らしく感じたものです。交響詩『長良川』が始まると、その迫力のある調べと荘厳な響きはさながら清流のうねりのように迫ってきて、圧倒された私の目からはいつしか涙があふれ出ていました。私が岐阜に戻り岐響の理事に就任したのは、その数年後のことになりました。

創立55周年記念公演をオーストリア ウィーンの『ムジークフェライン』で行うことが公演の1年半前に決まり、理事会では、どうすれば満席にできるかというところが焦点となりました。ジャンボジェットをチャーターするというのは意見もありましたが、私をはじめ誰もが満席にする自信がありません。頭を抱えている中、新しく理事になられた森さんが先遣隊として現地に行くことになり、大きな成果を持って帰国されました。この年は岐阜市・ウィーン市・マイドリング区姉妹都市提携15周年にあたり、在オーストリア日本国大使館田中

特命大使に骨を折って頂き、多くの関係者をコンサートにお招きすることになりました。また岐阜の企業に依頼をして現地の方々を招待できました。これらの朗報を受け、ウィーン公演の成功を確信しました。

『ウィーン公演』は、私にとりて初めてのヨーロッパであり、行き交う人々や街並みの全てが日本と西洋の違いを肌で感じさせてくれました。異境の地での不安を他所に、公演は岐阜からの応援ツアー約250名含めて観客1300名で立見席が出るほどの大盛況でした。交響詩『長良川』は、故郷の長良川に前日川下りを楽しんだドナウ川を重ねあわせて聴きました。楽しい時間はあつという間で、大喝采の内にウィーン公演は終了しました。

5年後の創立70周年記念は『ニューヨーク公演』です。あのマデイソン・スクエア・ガーデンで行います。次はどんなドラマがあるか、今から期待に胸が高鳴ります。

(株式会社 エスライン
代表取締役社長)

塚田 隆雄先生 インタビュー

今回定期を初めて振っていたと思いますが塚田先生、まずは先生の音楽との出会いについてお聞かせ下さい。

僕が音楽と出会ったのは非常に遅くからで、その出会いは高校に入ってからでした。それまではサッカーをずっとやっていたんですが、高校で吹奏楽部に入って、そこでユーフォニアムを始めたのがきっかけなんです。

サッカーからユーフォニアムへ転向ですか？

サッカーから吹奏楽へ行ったのは、こんな話書いたら恥ずかしいんですけど、僕実はその時、バンドをやっていたんです。ドラムを叩きたかったんですね。これはサッカー少年の考えることだと思っただけなんですけど、吹奏楽部って、バンドが出来るよとだと勝手に思っていました(笑) 軽音楽部と勘

違いしていました。それで吹奏楽部の説明会に行くと、希望の楽器を聞かれるのですが、僕はもちろん迷わず第一希望にドラム、つて書いて、第二希望は他に知ってた楽器、トランプ、第三希望は、あと他に楽器を知らなかったから、隣の子に一番有名な楽器を聞いたらサックスつていうからサックスつて書いて、それで入部したんですけど、手渡された楽器が、ユーフォニアムという当時の僕にはよくわからない楽器で。そういう出会いでしたね。そこで勘違いしてなければ、例えば外の場所ですら、バンドをしていたら、今、こうはなっていないから始まらないかと。そんな勘違いから始めた音楽人生かもしれません。

その後レッスンを受ける等しいくうちに、学校の先生、吹奏楽部の顧問の先生になりたくて、音楽大学を目指そうということになり、名古屋芸大に入学しました。大学2年生の時に指揮法という授業があり、そこでたまたま僕が授業を受ける年に赴任されてきたのが、高谷光

信先生だったんですね。高谷先生の授業を受けて、指揮の世界というものを垣間見るうち、指揮をやりたいなという思いが強くなり、高谷先生の門を叩きました。

最初は先生の本番やリハーサルに付いて帯同する、いわゆる鞆持ち、そこから始まりました。最初はレッスンではなくて、先生の練習、リハーサルの中で何をされているのか、どういう準備をされているのかということ、すべてを見せていただきました。それが今の僕の指揮活動の糧になっていることは間違いありません。そのような形で大学在学中は先生に付いて勉強させていただきました。

大学を卒業してからは、名古屋市で毎年、文化振興事業団という団体が主催しているミュージカル、オペレッタが1年に1回公演があるのですが、その副指揮に呼んでいただきました。そこではセントラル愛知交響楽団がいつも本番の演奏をしていらっしやるので、それがご縁で本番にも呼んでいただけになりました。学校公演だったり、岩倉で岩倉定期演奏会というの、も任せていただいたりして、そこからプロの方のキャリアがスタートしたのかなと思っています。セント

ラルの皆様とは今も一緒にさせていただけます。

塚田先生は岐響の定期演奏会は今回が初めてということになりますね。

はい、僕のような若い指揮者を定期という大きな舞台に呼んでいただけのことを、すごく嬉しく、また責任も感じています。岐響へはこれまで、高谷先生の代棒という形で、二回くらい振らせていただいたことはありました。あとは高谷先生がリハーサルされるときに、鞆持ちとして付いて来たことも3、4回あります。

まだ人生経験も浅い僕がどのようにやるのかというのは皆さんも興味があるのではと思います。人生を重ねた者にしか出ない深みは無いかもかもしれませんが、今の僕が一杯楽譜を読んで感じるものを皆さんと作ってあげたらなと思っています。

今回の演奏会では、どのような事を大切になさっていらっしやいますか？

生きたアンサンブルをしたい、と

思っています。音量のバランスを整えたりすることも大切ですが、それ以上に、今、周りの人たちが、どんな音符をどのようにやっているかというところを感じること、それに対して自分が出す音の種類はどうしたらいいのか、ということを感じながら演奏していただきたいと思っています。例えばモーツァルトは、楽譜に書いてあることが少ないので、どのように音楽にしていこうかと考えた時、このパートの音がどうなっていて、それをどうすること、いい音楽になっていくかっていうことを一緒に考えながらやっていきたいと思っています。

また、是非やっていただきたいこととして、長い音符を、生きた音符にしたい、と思っています。細かい音符は意識しようとしがちですが、音が伸びているところにこそ、フレーズのエネルギーとか、大事な要素が隠れています。その結果、音が動いていたり、フレーズが進んだり緩んだりすると思うのです。どうしても長い音符を演奏される時、ステイしている、待ちになっている、そうすると音楽的には推進力がなくなってしまう、す。なるべくいい推進力でやりたい、長い音符を前向きに歌う、次の音

替わりまでを歌う。それは楽譜にクレッシェンドがなくても、音をつないでいったほうがいいところは僕も積極的にクレッシェンドします。それはただ音を大きくしてほしいのではなくて、そこに本当にあるフレーズ感を感じていただきたいのです。



各曲につきまして、先生のこだわられていることはございますか？

モーツァルトは、先ほども言いましたけど、音符に対しての要求や情報が少ないので、どうしても淡泊になってしまふ。現在はベーレンライターの楽譜が流行っていますが、今回僕はブライトコプフ版でお願ひしました。ベーレンライター版は

原点復帰、つまりモーツァルトが書いたそのままの、白紙の楽譜を見つけないという流れのもと出版されているのですが、そうすると、過去の演奏家たちがやってきた自然なフレーズとか、強弱というものが失われてしまいます。そういうものも感じながら、しかし最終的にはオリジナルティのある演奏をするには、ブライトコプフ版がいいのかなと。今回その選択をしたので、音の動き、フレーズがどう動くのかということ、何を大事にしてやっていきたいなと思っています。また、今回の演奏会の中ではこの曲だけ古典の曲なので、古典ならではのしゃべり方、和音の進行を重んじるという古典の発想、それは大事にしていきたいですね。

ベルリオーズはこれだけ大きな曲を僕のようなキャリアで出来ることはなかなか無いことなので、非常にプレッシャーを感じています。この曲は、1830年に出来ているのですが、その時代から考えると、ありえないような音の進行等が見られます。これはバースタインがそう言っていて正にそうだなと思うことですが、「これはサイケデリックなシンフォニーだ。」と。その後の時代に生まれる現代音楽を彷彿と

させるような、何故この時代にこのような音楽が生まれたんだというところには凄く興味を感じます。急なテンポのチェンジ等、こういうところに彼の書いた精神状況や思いというものを読み取って演奏していきたい。かなりアグレッシブな演奏になると思っています！ 若いので許してください(笑)

先生の今後のご活躍はいかがでしょう？

流れのままに、が心情ですが(笑)新しいこととして、今年から愛知県の新和高校に音楽科がありまして、その非常勤講師を拝命しました。教えるということをしなから逆に自分も成長出来ればと思っております。また、去年からはスタジオリの音楽だけの演奏会をツアーでやっています。クラシック以外の作品もやったりミュージカル俳優の方とコンサートをやったり、広い視野を持って音楽をやっていきたいですね。

本日はありがとうございました。

インタビュアー Hr 畑 匡人

憧れのホルン・憧れの岐響

畑 匡人

岐響との出会いは小学校6年生の夏。当時開催されていた岐阜中部未来博へ、父親と遊びに来ていた時のこと。父が「あれちよつと見たいで見に行こつか。」と向かった先でやってたのが岐響でした。その時の景色を今でもはつきり覚えていいます。

そんな父の影響もあり、次第に音楽の興味が芽生えます。父が録画していたライブチャイヒ・ゲヴァントハウスの来日公演のビデオテープが面白くて面白くて、毎日擦り切れるほど見るように。そこで音楽、オーケストラの魅力を感じる中で、「あの楽器だけは何か特別！」と感じたのがホルンでした。

音色や和音に魅了されたのは勿論ですが、それ以上に、オケの中でのホルンの立ち位置、やっつる仕事に魅了されていたのだと思います。旋律をやる楽器には全然興味がありませんでした。少し斜め後ろの辺にいて、いつも何か変わったことをやっている。時々ぐつと出てきて、意味深いフレーズを唳々と吹く。普段は優しいやつが吠えた時の怖さ。常に冷静になつてオケ全体を俯瞰し、与えられた仕事を着実にこなす姿。謙虚さ、気高さ……。そんなホルンの魅力を知るにはどれだけでもいいので、R. シュトラウスの歌劇

を是非。ホルンとは、ここまで人の心の深いところまでも描けるのかと驚き、その音楽に感動します。)

大学の吹奏楽部でホルンを初め、その後もしばらく吹奏楽を続けるも、当然「オーケストラで吹いてみたい。欲を言えば、無理かもしれないけどあの岐阜県交響楽団で吹いてみたい。」と思うようになりました。

岐響へ入団させていただき初めて、オケでホルンを吹くことの楽しさと厳しさを知りましたが、時々ハッと我に返ることがあります。「自分は今、あの子供の頃に父と見たオーケストラに入れてもらつてんだ。」と。勿論感慨に浸つているだけではありません。上手になりたい！の気持ちは日々増すばかり、毎日コツコツ行っ練習が楽しい日々を送っています。

ボクとH美の関係

虫賀仁美

ボクがH美と出会ったのは、高校の音楽室。吹奏楽部の見学に来たあの日、ボクの丸みを帯びた輝くボディに悩殺。当時、高校生に人気がなかったボクは、すんなりとH美の両腕に抱かれることになった。見た目にクラツとなる性質は、今も昔も変わらないらしい。

あれから30年。H美が24時間365日営業のサービス業に就いた時には、さすがに別れを覚悟したが、職場の温かいご理解と岐響の皆さんのサポートのおかげで、今もH美の腕の中に納まつている。

H美が言うには、ボクの魅力は何と言つてもその声質。木管群とけこむ時は柔らかく、金管群とハーモニーを作る時は勇壮に、どんな相手も受けとめる度量の大きさはボクならでは。加えて、主役としても、脇役としても、華麗に役をこなす振り幅の広さ。そして何よりその魅力がスパークするのは、複数の同じ部族達と共に歌う時だとH美は力説する。和音がスパンツとはまった時の心地よさといつたら……魂が昇華するような例えようもない喜びを感じているみたい。H美との思い出なんて数えきれない。公演前日に、泣きながらウィーン街を歩いていたら時も、ボクは背中で

見守っていた。定演当日、楽譜を忘れて動転していた時も、傍らでおとなしく黒いケースの中にいた。花粉症真っ只中、マスクもできず屋外ステージで鼻水をたらしていた時も、真夏の体育館で気を失いかけた時も、ボクはH美の胸に寄り添っていた。

それにボクは、H美にとつてかけがえのないたくさんの人を引き寄せた。ボクと共にいたからこそ、出会えた大切な大切な仲間達。H美の一生の宝物だ。

憧れの恩師と共に岐響のステージに立つという、中学時代からのとつもない夢を叶えてあげたのもボクだ。その感動は今も忘れていない。

H美の一部と言えるくらい、なくてはならない存在となったボク。あと何年一緒にいられるかを考えると、お互い夜も眠れないくらい不安になるけれど、ボクにふさわしいパートナーでい続けようと、日々の鍛錬に励んでいる様子だ。

最後に、ボクの魅力を十分に堪能できる作品をご紹介します。シューマン作曲「4本のホルンとオーケストラのためのコンツェルトシュテュック」だ。H美は精神的に厳しい時、気が付くとこのDVDをばーっと見ている。すると不思議と力が湧いて、明日もがんばろうーと思えるんだって。知らないなんてもつたない！ぜひお試しあれ。



Louis Hector Berlioz

子どもたちの笑顔を求めて

― 学校における演奏会指揮の喜び

岐響トレーナー・コントラバス奏者 田中 陽治

平成3年七夕の日曜日。中学校の音楽科教員をしていた私は、ヴァイオリン弾きの妻、演奏会後の川遊びが楽しみな子どもたちを乗せ、家族で車を走らせていました。向かうは、県教育委員会がスタートさせた「岐阜県へき地児童生徒芸術フェスティバル」が行われる武儀郡(当時)板取中学校体育館。

ふだん、生のオーケストラ演奏に触れる機会の少ない地域に出かけて、小学生や地域の方々に聴いていただくという、年1回の事業のスタートです。

あれから27年。数年間途切れたものの、今は「県芸術文化アウトリーチ事業」として復活し、現在に至っています。

そして、音楽の先生だからやれるだろう? くらいの感じで任されて以来、今日までの30回近い全ての演奏会の指揮・進行を担当させていただいてきました。当時は定期公演以外の依頼演奏もすべてプロの指揮者を招いていましたから、この事業をきっかけに多くの岐響演奏会の指揮をさせていたただけるようになったことは、私の人生において大きな幸せの足跡です。さらにその間、岐響から本格的に指揮法を学

ぶ機会をいただき、教職の傍ら毎月大阪までレッスンに通わせてもらったことにも感謝があります。

■ 子どもたちの笑顔を求めて

さて、こういった演奏会の最大の魅力は何といつても子どもたちの笑顔です。内容を考えるに当たり、いかに子どもたちの笑顔をとくさん生み出すか、それが最大の課題。毎回、全体の流れや話す内容を子どもたちの反応を予想しながら考えています。(本職としての授業づくりより真剣だったかも!) 一例を紹介しましょう。

昨年12月実施のアウトリーチ演奏会(高山市清見小中学校)

まずはあいさつ。「みなさん、こんにちは!!」。私の大きな声に子どもたちが負けない声で反応してくれるところから演奏会は始まります。

① フアランドール(ビゼー)

迫力たっぷりのオーケストラらしい曲でスタート。小学校4年生の教科書で「(2つの対照的な)旋律が重なり合う面白さを感じよう」と記された鑑

賞曲でもあるので、迫力を感じただけに終わらせられないよう、旋律をやさしく解説してから棒を振り下ろします。

② 楽器紹介

全員が楽器を高く掲げると「わぁー」と大きな反応。そして弦、木管、金管、打楽器の順で、私の解説と実際の演奏で各楽器の特徴や音色を紹介しします。「うまのしっぽ」や「調理用ロート+鉄パイプ」などがここの定番!

③ おどる子ねこ(アンダーソン)

もう一度全部の楽器によるサウンドを感じ取ってもらいます。この曲も小学校1年の鑑賞曲。ねこの鳴き声や遊んでいる様子が、どんな楽器でどのように表されているかな? と投げかけて演奏へ。

④ 「大きな古時計」の主題による変奏曲(私の作品)

最初に「大きな古時計」をみんなで歌い、続いてそのテーマがいろいろ変化化する、変奏曲の面白さ満載(のつもり:)の自作曲を演奏。序奏・テーマと6つの変奏曲の演奏に「今度は象さんみたいな時計さんが踊るよ」「時計さん、おなか痛いんだって...」などの演技付きナレーションも加えて曲のイメージに誘い込みます。この曲は私も指揮者から役者へと、変奏ならぬ「変身」です。

⑤ 指揮者コーナー

ここからは参加型に。フアランドールの最後の迫力ある部分を子ども3人が指揮。そして、指揮によってテンポやニュアンスなどまったく違う表現になることから、指揮後のインタビューでは、それぞれから感じた音楽的な味わいを紹介し、「すごい、拍手ー!」。

また、指揮者コーナーの冒頭では、会場の全員にも指揮を楽しんでもらえるよう、振り方を教えて、全員の指揮でオーケストラが演奏する場面を設定しています。

⑥ みんなで歌おう

《清見小》校歌、歌えバンバン
《清見中》校歌、ふるさと

ホルン奏者K氏による両校校歌の管弦楽編曲版で、普段はピアノ伴奏の校歌をオーケストラをバックに歌ってもらいました。みんな大喜び。学校での演奏会ではいつも大切にしていることのひとつです。

そして合唱。純粋な心をもつ子どもたちの明るく、元気な歌声に、毎回毎回、演奏者側が心動かされます。至福のひとつです。

「子どもたちとの共演はいつも私たちの心を温かくしてくれます。歌えバンバンでは、すごく抑揚をつけて歌ってくれていて、見えなくなる楽譜を追うのに必死でした」「子どもたちの合唱に

涙腺崩壊！(団員のFacebookより)
中学生の合唱「ふるさと」には、地域の方々の歌声も加わり、体育館全体の心が一つに。

⑦モルダウ(スメタナ)

歌による感動の余韻を感じながら最後の曲へ。締めくくりは、スメタナが全聴力を失いながらも書き上げた祖国を愛し讃える曲。約13分とやや長い曲なので、事前に解説プリントを作って学校へ送付。中学生には曲の時代背景と作者の思いにまで心寄せられるといいねと語りかけて演奏。ただこの日は私が曲にのめり込みすぎて振り間違えるハプニング勃発。でも冷静なコンマス氏と団員のコンタクトで何事もなかったかのように終了。プラボー&ごめんなさい。

⑧クリスマスフェスティバル

サンタさんの帽子を頭に、温かく、そしてエンディングは華やかに演奏してすべて終了です。

「おどる子ねこのバイオリンがすてきです。もつとほかの曲もききたいです。私もひいてみたいです(小1)」「オーケストラのコンサートは失礼ですが興味はありません。ですが今回鑑賞して、生は迫力があって美しかったです。また鑑賞したくなりました(中2)」

後日届いた感想です。小1ちゃん、バイオリン弾いてみてね。中2くん、正

直にありがとう。機会があったらまた生で聴いてみてくださいね。

■棒を振っているときの私は…

○スコア(総譜)を見ながら曲の解釈や合図を棒で示している

これは指揮者として当たり前。

○指揮台に置いた「時刻表」と時計を見て進行状況を確認している

前夜、本番どおりにしゃべり、歌いながらのエア―指揮、つまり「ひとりりハ」で時間を計って、終了時刻から逆算しながら曲ごとの経過時刻表を作成。

しながら曲ごとの経過時刻表を作成。スクールバスの時刻などから延長は許されないの、本番中は常にチェックし、予定とのズレを見て話の内容量を修正します。本番中に一番気を遣っているのはこれも。

○背中で子どもたちの反応を感じて楽しんでる

「口ずさんだり身体を動かしたりしているからね!」。子どもたちは実に素直に、自然に反応してくれます。そしてそれが背中で分かるんです。また「あ、これ知ってるー」なんてつぶやきもいっぱい。私も団員も笑顔が溢れます。

○演奏のあと、次の曲へのつなぎで何を話すのかを確かめている

話す内容の確認とともに、特に背中に「マイナスの空気」を感じたときは、どのように空気を変えるかを考えま

す。何かで笑わせようか、とか。「はい、次」なんて嫌ですから。授業と一緒です。○団員の表情や演奏の様子を見て楽しんでる。

こういう演奏会では団員の様子がふだんと違うんです。素のままというか、みんな「パパママ、にいちゃんねえちゃん」(一部、じいちゃんばあちゃん!)になっている。子どもたちの力です。

○汗を拭いている(番外)

普段の運動不足もあって、本番中の汗は半端ないです。特に目に入ると痛い。眼鏡の内側に飛ぶと拭き取るのが大変だし。一度、ハンカチを忘れたときがあって、恥を承知で上着の袖口で拭いまくる。本番1回振ると最低1kgは体重減少です。そのあとは……ですが。

平成19年。眼の疲れから51歳で教員を中途退職した私。24時間がフリータイムになって、朝ドラ(どんど晴れ)、テレビ体操、ワイドショー、水戸黄門の毎日。覚悟はしていましたが、やはり何か虚しさを感じる毎日でした。

ある日も暇にまかせて資料を整理していたところ、出てきたのが学生の時に作った「あめだまのうた」手書き譜。師匠・故兼田敏先生の作曲法の授業で「よーじ、おまえ先生になったら子どもらにこれ歌わせる。喜ぶで

えー!」と褒めてもらえた曲。初任校・長良東小学校で担任した子どもたちが、いつも喜んで歌ってくれました。

これをきっかけに心に灯が再点灯、子どもたちの笑顔をまた生み出したくなり、半年間かけて「大きな古時計の主題による変奏曲」を作曲。その後も幼児向けの「うたのどうぶつえん」「ほくのわたしの1ねんかん」などを作ってきました。今はこの8、9月に指揮するアウトリーチ用に「1ねんかん」を小中学生向け一部改訂中です。

「二つの楽器の音もきれいだったけど、合わさるともつときれいな音だった(小3)」「ずつとひきつけられたままでした。僕もあれだけ楽しそうにできるものがほしい(中3)」

これからも子どもたちの笑顔を「楽しそうにできるものをもつ」素敵な仲間たちとともに求め続けていきます。



'18ファミリーコンサート アンケートより 2018/3/18 長良川国際会議場

今回も沢山のお客様にご来場いただき、また沢山のご感想をいただきました。その中から僅かではございますが、ここに紹介させていただきます。

- ・初めて岐響さんを拝聴しました。オーケストラというものを、こういう形で聞いたのは初めてといても過言ではなく、この演奏会が基準になるかも、と思って参りました。子どもたちに分かりやすく、初心者にも分かりやすい曲目で良かったです。そして音楽のことはよく分かりませんが、難しい(演奏が)曲が多かったように感じます。みなさんの努力も感じました。皆さんの演奏がもっと評価されますよう、陰ながら応援しています。
- ・弦楽器と管楽器が合わさった演奏はあまり聞かないけど、お互いの音を聞いて、音楽を作っている感じがとても良かったです。どの曲も聞いていてとても楽しかったです。管楽器のハーモニーの時と主旋の時の吹き分けがすごいと思いました。Herかつこ良かったです!私もきれいに吹きたいと思いました。ピアノすごかったです。素敵な演奏をありがとうございました!
- ・指揮者コーナーに感心あるが、手をあげる勇気がなく…今年もダメ! 子ども達の勇気に拍手を送ります。今日は始めて家族3人できました。どれも思い出に残る曲ばかり~ありがとうございました。
- ・毎年楽しみにしております。ウィットに富んだネーミングなど、毎回感心しております。「となりのトトロ」…懐かしくよく耳にした曲が、多くの楽器がどのように音を出しているのかが視覚的に分かり、嬉しさに目がウルウルになりました。「ディズニー映画」…ボーカルが加わることで、すっかり印象が変わり、新鮮みを覚えました。指揮者は楽団だけでなく、ボーカルの方にも気を向けていることに気づきました。すごいですね。所用があり途中で退館せねばならず、心残りです。ありがとうございます。

